

麦わらの一味と不思議な一週間【完】

シーシャ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

家の扉がサニー号とやらと繋がったらしい。

開けると突然繋がる船上に戸惑いつつ、深く考えないでいろんな人たちとちよつとおしやべりしてみたり。

7話完結、中編。

社会人女性が主人公。

完結しました。

目次

1.	ベッドルームへの扉	1
2.	浴室のドア	3
3.	玄関扉	5
4.	押入れの襖	7
5.	トイレのドア	9
6.	クローゼットの扉	12
7.	ベランダのガラス戸	15

(完)

1. ベッドルームへの扉

部屋に戻ると他人がいた。

「あ？だれだお前」

「ウオッフ！失礼しました」

部屋の真ん中でトランプをしている男の子2人と犬？みたいな動物がいた…。人がめちやくちやくつろいでる所に邪魔してしまったと急いでドアを閉めて思い出した。失礼しましたっていうかココ私の部屋じゃね？

「つてことはあの人たちってドロボー？」

泥棒のくせに部屋でくつろいでるとかどういことだ。しかもなんか香ばしく焼いた肉のいい匂いとかしてたし。人ん家でBBQとか許せん！私なんて給料日前で毎食TKGだったのに！

「ゴルア！不審者ども！人様ン家で何くつろいで……おや？いない？」

再度開けた扉の先には見慣れた自室があった。もちろん誰もトランプなんてしてくつろいでいないし、肉の匂いなんてのものない。まさかどこかに隠れているんじゃない、なんて思うけど小さな部屋に隠れる場所なんてないし、部屋の真ん中には人が座っていたような床の暖かさもなかった。

「……え、待って。そもそもこの部屋床に何人も座れくない？」

部屋の真ん中にはローテーブルがあるし、人をダメにするあのソファもあるし、ベッドもダンスもある。しかもたしかあの人たちって床に直に座ってトランプしてて…でも、そんな空間どこにもない……？

「げ…幻覚とか初めて見たわ…あはは…」

乾いた笑い声が口から漏れたけど、内心ガタブル震えてます本当にありがとうございます。幽霊かあ…幽霊とか初めて見た…あんなリアルに見えるもんなんだなあ…。身体中に出た鳥肌をさすりながら早く寝てしまおうとベッドに向かって、枕の上に見慣れないものを発見した。

「……………なにこの帽子……」

所々繕った跡やくたびれたところのある、赤いリボンがついた麦わら帽子がちよこんと枕に乗っていた。まさかこれも幻覚だろうかと目をこすつてもなかなか消えない。思わず辺りを見回して幽霊がいないか確認したけれど、この帽子以外に何の異常もない。指先で突いて、その後おそるおそる持ち上げた麦わら帽子は、思ったままの重さや手触りだった。

「窓から入ってきた？…つてこともないだろうし…誰のだろ？まあいつか。今日はもう寝ちやおう……」

幻覚のせいでもっと疲れた。麦わら帽子を適当にタンスの上に放置して早々に布団に潜り込んだ。BBQ…いいなあ…ひもじいなあ…。給料が出たら絶対に肉を買って焼いて食べよう、そう決意した。こうして私の奇妙な一週間は幕を開けたのだけれど、この時の私が知るよしもなかった。

2. 浴室のドア

今日も疲れた。仕事が後輩の手違いで長引いてしまったし、駆け込んで飛び乗った電車は超満員だったし。後輩もなあ、メモ取るとかもうちよいやる気を見せてくれたらこっちのモチベーションもただ下がりしないのになあ。同じことを何度言ってもメモ一つとらず、失敗しても黙ってハイハイ言うだけじゃお手上げだつての…。人を育てるって大変だししんどいばかりだ。

「あーあ、私も気楽な新人に戻りたいよーお」

泣き言を言いながら素っ裸になって風呂の扉を開けた先に、とびっきりのボンキュッボンなお姉さまがいた。

「あら」

「しし失礼つかあした!!」

ツパーン!と、扉をスライドさせて閉めた。え、何今の?なんか、同じ人間の女と思えないほどのとびっきりのナイスバディでグラマラスなエキゾチックなお姉さまがいた!?!えっもしかして私、家を間違えた?急いで着ていた服を着直して表に出ると、間違いなく私が賃貸してるマンションの、私が借りている部屋番号で合っていた。というかそもそも鍵が合っていて部屋の家具が同じ時点で間違いなく私の家だった。だというのに、なぜ他人が?

「ハッ…まさかメンヘラ女性が彼氏の家と間違えてコッソリピツキングして侵入し、彼氏のいない間に彼女みたいになりきろうとシャワーを浴びていた最中だったとか…?」

どこの昼ドラだと思う余裕もないぐらい突飛なストーリーが私の頭に浮かんだ。しかも疲れた私の頭ではそれが一番ありえることだと思いついてしまった。なのでメンヘラ包丁で刺してくる、という法則のもとに盾代わりのフライパンを携え、再度風呂に向かった。しかし風呂場からは湯気も洗剤の匂いもなく、深夜の暗さしかなかった。

「ええ…どうい(う)と…?」

目も覚めるほどのとびつきりの美女が消え、あるのは普通の風呂場だけ。扉を開けても濡れた気配なんて全くない。まさか幻覚でも見たのだろうか。

「あつ、そういえばこの間もなんか幻覚見たわ…。疲れてんのかな…」
どうせ明日は休みだし、今日はさつきとシャワーを浴びて早く寝てしまおう。性別や見目が麗しかったからか、前回のように幽霊だと怯える気持ちもほとんどなかった。むしろ眼福だと拝みたいぐらいの驚くべきナイスバディだった。また見れるものなら見させてもらいたい…。

「でも今度は目も覚めるほどのイケメンがいいなあ…」

布団に入って己の欲望を口にした。枯れた生活に潤いというなら美女とイケメン、これに限る。できればハリウッドスターバリのイケメンで頼む。ぐふふと笑いながら夢の世界に旅立つほんの一瞬、あることが脳裏に浮かんだ。そういえば私、いつも換気のために風呂場の扉を開けてたのに今日は閉まってたよなあ。なんでだ？

3. 玄関扉

「あつどうも」

「ヒイエエエエ!!」

目の前にドクロが現れて速攻扉を閉めた。幻覚だ、また幻覚を見たんだ、と頭を抱えてうずくまる私を咎める人はいない。だって深夜の玄関前だもの。人っ子一人いねえ。

「あつ…あつ……なんでドクロ……なんで…」

ありえないものを見た&恐怖で鳥肌と体の震えが止まらない。エンドレス恐怖。腰が砕けて座り込んだ廊下は現代社会よりも冷たかった。今までのパターンは自室や風呂場など家の中の扉を開けたタイミングだったから、最近は扉を閉めきらずに対策していたというのに。今回はそんな努力をあざ笑うような、まさかの玄関トラップ。しかも間近にドクロ。ふざけんな、本気で仰け反って悲鳴あげたわ。「あのー、大丈夫ですか？」

さすがに深夜とはいえ悲鳴がうるさかったのか、誰かが気遣うような声をかけてきた。ご近所さんだろうか。迷惑をかけてすみませんという気持ちよりも、誰か他人がいてくれて心底助かったという気持ちで顔を上げた。

「たっ…助けてください…ドクロが家の中に…!」

「えっドクロ!?どこに!?!」

「私の家の中……に……」

目の前にドクロ、再び。嫌がらせのように間近に接近しているドクロが、ドクロのくせに表情豊かに気遣うような顔をしてる。でもドクロ。されどドクロ。

「ヒエツ」

私、死んだ。

—————

「あれ？生きてる」

ぱちぱちと瞬きをして呟いた言葉も、持ち上げた自分の手の感覚も至って普通だ。むしろ寝起き感満載。やたらとスッキリ感じるのももしかしなくても熟睡したからだろうか。ということはあれは夢？

「なあんだ、夢かー！生きてるって素晴らしい！」

「ヨホホ。いやまったく同感です」

「ですよねー！ってドクロおおお!!」

「えっ!?!どこに!?!」

「アンタだよ!!」

！
なんだこのドクロ！怖い！恐ろしいほどにノリツツコミがすごい

「もう帰りたい…家に帰らせてえええ…」

「あ、ご自宅でしたらその扉から帰ることができると思いますよ
「え?!」

「扉の開け閉めに関する能力ではないかとルフィさんたちから聞いて
いましたから、もしかして、と思ひましてーードアストッパーつけて
ます」

「仕事のできるドクロだった!!!」

「えっドクロ!?!」

「いや、もうそのくだりはいいんで。…あ、本当に廊下と繋がってる。
いやー、ありがとうございます。無事家に帰れそうです」

「それはよかった。あ、お礼にパンツ見せてもらえませんか？」

「オイなんだよこのドクロ。ドクロな上に変態かよ」

「ヨホホ。気をつけてお帰りくださいね」

「ドクロに気をつけてとか言われるとなんか不吉…。でもまあ、お世
話になりました」

「ええ。こちらこそ、噂のお嬢さんからお話を聞けてよかったです。
またいらしてくださいね」

「あはは…まあ、機会があれば」

4. 押入れの襖

「うおっ!?!……あ、どうもこんにちはー」

押入れを開けたら緑の髪の人が馬鹿でかいダンベル持ってた。うわでっかー!?!すごー!?!でもガラ悪いー!

「……………誰だお前」

「高嶺と申します。えーと、こちらってサ…なんとか号って名前のお船ですかね?」

「敵か」

チャキ、と音を立てて構えてるそれはまさかKA・TA・NAってやつか。いやいやいや、やめてやめてそんな殺生沙汰とか…え、冗談、だよね…?

「違いますって!え、刀?!いやいや人にそんな向けちゃダメでしょ!直しましょう!ほら!どうどう!」

「…お前、うちの音楽家見てぶっ倒れたとかいうやつか?」

「は?音楽家?」

「ガイコツの」

「あー、あのアフロの?ってかあの人音楽家なんだ…えらいインパクト強い音楽家だな…いや、そもそも成仏せずに生きた人間の仲間になってる時点でだいぶアレだけど…」

「なるほど。話には聞いてたが、本当にただの女なんだな」

「はあ…まあ、普通の女ですけど。てか今日はドクロさんはどちらに?」

「下で何かしてんじやねえのか?」

「下?あー、そっか、扉ここだけだから無理か…。えっですすね、前に倒れたところをお世話になったんで、コレ…よかったら渡してもらえませんか?」

テーブルの横に置いてた紙袋を持ってきて、マリム…ガラの悪い兄さんに渡した。

「なんだこりや?」

「パンツです」

「はああ!!?」

「なんかパンツ見せろって言ってたんで、パンツに未練を残して死んだのかなあって…。あ、ちゃんと新品買ったんで大丈夫ですよ。とびつきりセクシーな紐パンにしておきました。男物のー」

選ぶの超楽しかった。材質はテッカテカのエナメル生地。ど変態ここに極まれりって感じのやつ。

「なんでだよ!!!なんかもう全部がおかしいだろ!!!」

「それ言うならドクロが立って動いて喋ってる時点でもうおかしいですしね!?!」

「確かに」

「まあそういうわけなんで。よろしくお願いしますー」

「おい」

「はい?」

なんだ、もうパンツはないぞ?。

「酒とかはねエのか?」

「酒? 買いに行けばありますけど」

「よし。なら次は酒とか持ってこいよ」

「あら、イケる口ですか? でも残念なことについてウチと繋がるか分かんないですよね」

「だからなんだ?」

「いや、四六時中酒瓶担いでおくわけにもいかないんで。あ、そのパンツは小さかったから別口ですよ?」

「チツ、仕方ねエ。ならできるだけ持っとけよ」

「了解です。じゃあ代わりに私にも何かお土産とかくださいよ」

「みやげ? ……あー……何がいいんだ?」

「おつ、くれるのか。じゃあ美味しいツマミでも用意しといてください。あとこつちでのオススメの酒とか」

「分かった。楽しみにしとけ」

「あはは。りよーかいです!」

5. トイレのドア

「うおっ!？」

「…っ!!びっ…びっくりした!!!」

まさか扉を開けた先で他人の驚く声を聞くななんて思いもしなくて、飛び上がるほど驚いてしまった。だってまさかトイレから出た瞬間とか。ないわー。後ろで水洗トイレがまだ流れてるんですけどー。やめてー。

「それはコッチのセリフだけ、お嬢ちゃん…あ、タカミネってあんたのことか?」

「ああ、はい、高嶺りんです。サなんとか号の方ですよね?」

「サウザンドサニー号だ。間違えんなよ」

「失礼しました。今日は…やっぱり同じ人はいないのか…」

いやまあどうせトイレ入るのにマリモさんに渡す用の酒とか持ってなかったから別に全然いいんだけど。ふむふむ、なるほど。

「ん?なんだ?」

「いえ、なんとなくこの現象の法則が分かっってきました。いつも違う扉からだとか、同じ人には会えないとか、扉を完全に閉めたら切り替わるとか、日時は不明だけど必ず私が一人の時に起きるとか」

「ほー。なるほどなア。面白いヤルフィ、ウソツプ、チョツパーの3人が居た以外はそっちと同じ法則だな」

「え、誰ですって?」

「うちの船長と狙撃手と船医だ。麦わら帽子のやつと鼻の長いやつ、それからトナカイだな」

「トナカイ?は?トナカイ?」

「おう。しかも船医だ!」

この人は一体何を言っているんだ???

「…?…?…?…え、はあ?…あー…ドクロが音楽家だからトナカイが船医もありえる…?…ああ、あの犬みたいなのはトナカイだったのか…?」

「でもって俺は船大工だぜ!!」

なにそれ???

「船大工? 船に乗ってるのにまだ船作るんですか?」

「いや、船の修理や改造なんかだな」

「なるほど、餅は餅屋つてことですか。構成メンバーも考えられてますねえ」

「だろ?」

そろそろこれが私の夢まぼろしじゃないとは分かりつつ、なんとなく現実を直視するには難しすぎる案件なのでスルーしてた。うーん、まともに考えても無駄っぽいし。

「ところでお嬢ちゃんの後ろにあるのはなんだ?」

「あー…トイレです」

「ほう? ちよいと見せてくれねえか?」

「え…変態?」

「バツカ! 褒めんなよ!」

「ガチの変態さんか!!! 嫌ですよ! うちのトイレに何するつもりですか!?!」

「心配すんな、壊しやしねエよ。アンタの所のトイレがどんな造りなのか見るだけさ」

「ああ、そういう…。じゃあどうぞ」

「悪いな。…貯水してレバーを引くことで水を流すつてのは変わらねエか。このボタンは何だ?」

「ああ、水量を変えたり便座を温めたりできるんです。あとお尻を洗ったりとか」

「尻を洗う!?!」

「私も使ったことがないんですけど、ここからノズルが出てきて、水鉄砲みたいに水が飛び出てくるんです。大便の後とかに使う人もいますね」

「はー…そうか、なるほどな! ちよいと試しても構わねエか?」

「ああ、じゃあ何か水を受ける物とかありますか?」

「これでいいだろ。もう処分する木端だ」

「じゃあどうぞー」

「おう！」

悪いなーと超笑顔で一人暮らし用の狭いトイレに巨体を捻って入る変態……やだ、なんか悪夢みたい……。

「……おお……おお!!!うおお!!!なるほど、距離や水圧も加減されてんのか！」

外人さんがウオシユレットで感動するって本当だったんだー。

「見て分かるんですねえ……」

「当たり前だ。……いやあ、なかなかいいもん見せてもらったぜ！ありがとよー！」

「トイレでそんなこと言ってもらえると思いませんでした。どういたしまして。じゃあ私はそろそろ帰ります。あ、そうだ、緑の髪の人にお酒を渡すって言ってたんですけど、好みのお酒とか聞くの忘れてて。ご存知ですか？」

「ゾロの好みか……。辛口で旨味のある米から作った酒とか好きだと思っうぜ」

「じゃあ日本酒でいけますね。了解です！あ、お兄さんはお酒とか好きですか？」

「おう。だが俺はコーラの方が好みだな」

「コーラですか！へー。じゃあ持って来れそうなら一緒に持ってきます」

「ありがとよー！じゃあ気をつけて帰れよ」

「あはは、ありがとございませす。さようならー」

6. クローゼットの扉

クローゼットを開けると女の子が男に襲われてた。突然のことに頭がついていかないままだったけど、一瞬目があつたその女の子が助けを求める目をしていたから、私は手から下げている袋から酒瓶を取り、大きく振りかぶった。

「で、りやああっ!!!」

「っ…がっ…!」

「はあ…はあ…だ、大丈夫…!?」

「ええ…!ありがとう、助かったわ…」

「よかつた…:…とりあえず、こつち来て、隠れよう」

女の子の手を引つ張つて、私の部屋に連れ込んだ。あ、土足…まあいっか。

「…あなた、タカミネリン?」

「うん。あなたはサウザンドサニー号の人だね。ってことはこの人も?」

「違う違う。たぶん外でのドンパチに紛れて来た侵入者よ」

「そつか、よかつた…いや、良くない!え、どうしよう、外に放り出す?それともあなたがこつち来る?」

「放り出すことにするわ。ちよつと手伝ってもらつてもいい?」

「うん。よいしょ…くつそ重いなこの人…」

「よつ、と。…あ、サンジくん!コイツ侵入者なんだけどどつか捨てといてくれない?」

「はいナミさん!喜んでー!!!…えっ、なんて素敵なお姉さま!!!」

金髪の男性がくるくる踊りながら近寄つてきた。おお、すごい身軽。てか素敵なお姉さまつてもしかして私?やだ、照れる。

「サンジくん、彼女がタカミネリンって人らしいわ。片付けが終わったらルフィたちも呼んでおいてくれない?」

「もつちろんですー!!!素敵なお姉さま、また後ほどお話ししようー!!!」

気絶した人の足を掴んで軽々と引きずりつつ、サンジくんとやらは走っていった。見かけによらずワイルドだなあ。

「なんか…インパクトの強い人だなあ…」

「あははっ！確かにそうよねえ！ね、改めてお礼を言わせて。あたしはナミ、この船の航海士なの」

「ああ、ご丁寧にも。高嶺りんです。職業はOLです」

「OL?」

「小さな会社で経理とか事務作業をしています。…ってそこ怪我してる！」

ナミちゃんとやらの手の甲に小さな傷ができていた。血が滲んで痛そうだ。

「え？ああ、平気平気！これぐらいしよつちゆうだし」

「いやいや、ダメだって！ちよつと待ってて、救急箱取ってくるから！」

「…へえ、ここがリンの家？」

「うん、そう。あ、こつちで手の傷口を洗って。んで濡れたままでもいいからこつちにきて」

「うん」

土足だと気付いたのか、靴を脱いで向こう側に投げた後、ナミちゃんには洗面台で手を洗っていた。その間に消毒液と絆創膏を用意した。あんまり怪我することなんてなかったから、中身はたっぷり残ってるし、期限も…あつ、そろそろ切れそうだな。気付いてよかった。また今度新調しとこう。

「ごめんね、ちよつと染みるよ」

「平気。わざわざありがとう」

「ううん。…あつ、そういえばそつちって船医がいるんだっけ？勝手なことしちやつたかな…。なんならちゃんとプロの人にやり直してもらってね」

「ありがと。あなたいい人ね」

「いやいや、普通だよ」

「って…あーっ！ルフィの帽子！こんな所に!!!」

「え、帽子？ああ、これってそっちのだった？」

「そうよ！うちの船長の帽子なの！見つからないと思つたらこんな所にあつたなんて！」

嬉しそうにタンスの上に置き去りにしてた麦わら帽子を手を取つていた。うんうん、持ち主の所に戻りそうでよかつたよかつた。

「あー、なんかごめんね。いつの間にか部屋にあつたから、ついつい置きっ放しにしてて」

「ううん、うちのヤツも何も言わなかつたんだろうし、仕方ないわよ」「そう言ってもらえるとありがたいや」

「んナミすわあああんっ!!!お姉さまあくあつ!!!」

「あ、サンジくんだ。じゃあ一緒に行きましょう」

「うん。あ、そうだお酒！」

「酒がどうしたの？」

「緑の髪の人にお酒渡すつて言つてただけけど、さつき割っちゃつたから。ちよつと台所にあるやつを持ってくるね」

「分かつたわ。じゃあ先に行つてるわね」

「うん。って、ああっ！」

外に出て扉を閉める。それは私もそうだけど、彼女にとつても普通のこと、何気ないことだったんだろう。でも、私たちの場合、閉めてしまうともう繋がらない。駆け寄つてクローゼットを大きく開け放つたけれど、もう手遅れだった。

「またお酒渡せなかつたや…」

ナミちゃんを助けるために仕方がなかつたし、全然そのことは後悔していない。

でも、私はいつまで部屋の中で酒瓶を担いでいればいいんだろうか。

あとコーラも。

ナミちゃんにも悪気がなかつただろうし仕方がないとはいえ、大きなため息が溢れてしまった。

7. ベランダのガラス戸 (完)

雨が続いていたらから久しぶりに外に洗濯物を干せる。しかも休日
に。ああ幸せ！

「今日も元気だいい天気♪洗濯物がよく乾くうおおお!!!?」

ベランダへのガラス戸を開けた瞬間、目の前に長い鼻の男の子が現
れた。なんで!?!今どこにいたの!?!

「うおっ!?!誰だお前……あ、あんたタカミネリンか」

あつ、よかった、ベランダに潜んでた不審者とかじゃなかった……
きつとサニー号の人だろう。

「え、うん、そうだけど……あ、ちょうどいいところに!コレコレ、先に
渡しとく!」

「ん?何だこりゃ」

「お酒とコーラ。なんかリクエストされたから」

「そりやわざわざすまねエな!そりやゾロとフランキーがアンタに
会いたがってたぜ。っていうか他のやつらもだけだよ」

「あらまー。ありがたいこっちゃ。でもこの部屋も……他に扉ないし無
理だねえ」

一回使った扉が使えないって法則っぽいし、一つの扉を開けている
間に他の扉を開けても無理っぽいし。男の子のいる部屋にも他の部
屋へと通じる扉はなさそうだから、きつと無理だろうなあ。

「ああ、そりや扉と扉で繋がるんだったか。コントロールとかでき
ねエのか?」

「無理無理。この間なんかトイレ出た途端にフランキーさんとご対
面だったし。恥ずか死ぬわ」

「あー……それでフランキーのやつがトイレの改造とか始めてたのか
……」

「船大工つてなんでもできるんだねえ……」

何でも屋さんだ。船大工つていうより日曜大工のお父さん?

「そんで、その持つてるやつは何なんだ?」

「洗濯物。ベランダで干そうと思ってガラス戸開けたら開通しちやつたからさあ」

「ん？そのガラス戸ってのはドアノブ捻つての開閉式か？」

「ううん、スライド式」

「で、ガラスってことは向こう側が透けてるわけだろ？今は俺の部屋が見えるわけだよな？」

「うん？……え、いや、ベランダあるんだけど。え、何で？え？はア！」

「おつ、落ち着けて！」

スライドして外に通じるはずの方は男の子の部屋に通じていて、ガラス戸が二枚重なっている方からは外がちゃんと見えている。なにそれ？なにが起きてるの???

「ちよつとそつち行つても構わねえか？」

「あ、どうぞ。あ、靴脱いでね」

「おう。……本当だな、確かにガラスの向こうは外の風景だ。俺の腕も透けて見えねエし……一体どうなってんだ……？」

「そういうええ法則があつてね。毎回違う扉からで同じ人に会わないとか、私が一人の時だとか、扉閉めると途切れちゃうとか」

「確かにサニー号のあちこちでお前が出たって聞くけど、同じ部屋つてのはなかったな……。でもよ、俺はアンタと会うのは2回目だけ？」

「えっ、そうなの!？」

「部屋で俺とルフィとチョッパーとでランプしてた時に……」

「ああー！」

「そういやいたわ！そろつと本人に気付かれないように横に回ると、たしかに見覚えのある長い鼻が！」

「……ああっ！そういうええ鼻の長い子がいた！」

「おい！わざわざ横から確認してかよ!!!」

バレてた。

「ははーん……じゃあ毎回別の人って線は消えたか……」

「もう全員と会ってるからなあ。2巡目が始まったとかじゃねえのか？」

「それもあるかも……。でもそれを言うなら私の家の扉とかもうないか？」

ら、これつきりで終了になるかもよ?」

「えつ、マジかよ! ああー…あいつらもガツカリするだろうなあ。…あ、でもよ、このガラス戸みてエに扉っぽくねエ扉からって可能性もあるんじゃないか? ホラ、例えば食器棚とか!」

「まさかー! それこそナイナイ!」

むしろそんなところが通じて、手だけとか目だけとか見えたら、私の心臓が死ぬ。ホラーは苦手なんだよ…。

「いやいやいや、万が一があるかもしれないねエじゃねえか」

「うーん…じゃあ万が一があつたら、ちよくちよくお世話になったつて船長さんにご挨拶したいなあ」

「そりやいいな。ルフィもアンタに会いたがつてたし、きつと喜ぶぜ」

「あはは。じゃあ、また次があつたらよろしくねー」

「おう。こいつもありがとな!」

「いえいえ。マリ…緑の髪の人とフランキーさんとナミちゃんとサンジくんと…まあ、みなさんによろしくねー!」

かくして、私の奇妙な一週間は幕を下ろした。何しろ一人暮らしの小さなアパートには、もう扉がないからね。麦わら帽子の船長さんや、トナカイの船医さんたちもお話ししてみたかったなあ、なんて思ってたらまさかの2巡目が始まったりするんだけど。それはまた別のお話。